

1992年に出版されたピーター・ローレンス氏の『The Making of a Fly』はショウジョウバエの胚発生に関する発生生物学の世界では有名な教科書の書籍だが、2011年にAmazonで2,370万ドルという途方もない値付けがなされたことから発生生物学に縁の無い人々からの関心も大いに惹くこととなった。サザビーズにおいて「オークション史上最も重要な文書」と喧伝された13世紀のマグナ・カルタの写本ですら落札金額は2,130万ドルであったことに鑑みれば、いくら同書が発生生物学の名著とはいえ、その値段が適切な水準から著

を大きく釣り上げる]、「多くの人が休暇を取る年末の時期にボーリング場の2時間の利用料金を5万円に設定する」など、進化したAIが人の足元を見るかのように振る舞うといった少々笑えない事態も発生している。

そして昨今取り沙汰されているのが「AI同士の談合」である*。AI同士が暗黙のうちに協調的な価格設定ルールを採用することで市場価格の上昇を招くリスクが指摘されており、実際にドイツのガソリンスタンドを対象にした研究では、孤立的な地域にある2つのスタンドが共にAIを採用した場合に価格上昇が観測されたとい

数 | 理 | の | 窓

2,370万ドルの教科書



しく逸脱した異常なものであることは明らかだろう。そして最も興味深いのは、これが人の手によるミスや冗談の類ではなく、最適な価格設定を行うことを目的に導入されたAIによって引き起こされたという点である。

購入パターンや競合の動向、時間帯、天候などの需要に影響し得る様々なデータを参照してAIを用いて価格設定を行う「ダイナミックプライシング」は今や様々な領域で活用されているが、冒頭の事象は2つの書店のAIが互いの動向（価格）を参照して自身の価格を更新し続けたことが指数関数的な価格上昇につながったと推測されている。10年以上前の技術的黎明期の出来事であり今となっては笑い話だが、現在では「ハリケーンの上陸に合わせてオンラインサイトの飲料水や防災用品の価格

う。金融業界でもAIを用いた取引執行が大きな広がりを見せているが、昨年10月にはイングランド銀行がAI導入に関するディスカッションペーパーの中でAIの談合リスクについて懸念を表している。AIの話題になると技術面とにかく関心が行きがちであるが、AIに倫理性を求める声は日に日に強まりつつある。

なお、『The Making of a Fly』を執筆したローレンス氏は自著が天文学的水準にまで値上がりしていく様を面白がって見ていたようだ。事態に気付いた書店により価格が106.23ドルに戻されてしまった際には、さぞ残念がったに違いない。（須貝 悠也）

* "Can algos collude? Quants are finding out", Risk.net, 2022/12/27